がん「個別化医療」紹介

徳島市でフォーラム

最新のがん治療の方法を紹介するフォーラム（徳島大学病院がん診療連携センター主催、徳島がん対策センター、徳島新聞社共催）が3日、徳島市の同大蔵本キャンパス大塚講堂であった。徳島大学病院の医師ら8人が遺伝子検査の結果に基づいて治療を行う「個別化医療」などについて講演し、市民ら約380人が耳を傾けた。

荻野広和センター長は、特定の遺伝子の変異によって発生する肺がんの治療法について説明。従来はどの患者に対しても画一的な治療しかできなかったが、遺伝子検査を行い、変異した遺伝子に適した「分子標的薬」を使うことで治療の効果が向上するとした。その上で「薬の選択肢が大きく増えている。作用と効果のバランスを理解し、納得して治療を受けることが大切」と訴えた。

地域外科診療部の徳永卓哉特任教授は、大腸がん手術後に再発予防目的で行われる「補助化学療法」について、再発リスクが低く、本来は必要のない患者にも行っていると指摘。現在は、血中に含まれるがん細胞の断片を検出する研究が進んでいるとして「近い将来、がんの再発リスクを判断して、本当に治療が必要な人の見極めが可能になる」と話した。

がんの発生リスクと運動習慣との関わりや治療中の栄養管理についての講演もあった。（山田優太）



最新のがん治療法が紹介されたフォーラム＝徳島市の徳島大蔵本キャンパス